

# 日本とこれからの台湾

国際教養大学理事長・学長、国際社会学者

中嶋嶺雄

(注) 本稿は二〇〇六年五月二二日開催の第二三二回虎ノ門DJOO(道場)での筆者による「日本とこれからの台湾」と題する講演から編集部がその一部を要約・編集し、筆者が加筆・修正したものです。

## 自民党総裁選への懸念

自民党の総裁選をめぐる報道が過熱しています。私としては非常に懸念することがあります。それは、産経新聞にも「中国が首相を決めるのか」というような記事が出ていたように、確かにそういう傾向があり、また、日本の側にそれに応じようとする動きがあるからです。

例えば、「次の首相が靖国に参拝すると、中国は日中関係を改善しない」、「日中関係が悪いと、困るのは日本だ」、「アメリカは靖国問題の解決を望んでいる」などということが報じられています。

大体「アメリカがこういつている」という場合は、アメリカ民主党派の一部の決まった人達であることが多いのです。一部の新聞などは、いかにもアメリカ全体が今の日本の対アジア外交、対中国、対韓国外交を批判しているかのようにうまく工作して報道していますが、そんなことは全くありません。私にもアメリカの友人がたくさんいますが、その多くは小泉さんの外交に満足しています。

逆に、もし次の総理が靖国参拝をやめるようなことを中国に内々に約束するということになる日本は大変なことになります。絶対にそうなるはずではありません。中国はこうした外交工作には実に巧みですから、余程注意しないと危険です。

## 「日中国交正常化」の教訓

そこで、歴史の教訓という大げさですけども、かつての日中国交正常化前後の日中関係を振り返ってみましょう。それと比較することで、最近の日中関係に対する教訓を汲み取っていただければと思います。

六〇年安保の後、世間は挙げて日中国交正常化へと動いていきました。日本のメディアも、日中友好、日中貿易促進、日中国交回復へと大きく動いていきました。まるで日中国交問題が解決されなければ、日本の将来はないかのような言論が日本を支配してきます。

そして、幾つかの団体が「中国もうで」をします。その中の一番協力的な団体は日中国交回復議員連盟でした。つまり、当時の与党自民党の議員も含めて、国民運動になっていきました。

そして、毛沢東や周恩来が日本側の運動に非常に巧みに呼応する形で、実は日本の内政に大変な干渉

をしてきました。その内政干渉は、あからさまに佐藤内閣倒閣運動には行きませんでしたけれども、やがて自民党の中に、日中議連の幹部や親中国派の人たちが出てきて、それらの人たちが連ねて総裁候補になったわけです。それはやがて、反佐藤の政治運動になっていきます。

ところで、佐藤栄作さんというのはほんとうに偉人だったと思います。日本は中国のことをほんとうに考える。しかし、台湾という存在をきちんとしておかなくやいけないということも最後まで考えておられました。佐藤さんの最後の記者会見にはTVや新聞の記者がいなくなったのですが、その裏側にも日中問題がありました。

しかし日本中は、一九七二年の田中内閣成立を機に、日中国交回復のほうに全部が動いていきました。当時私は、翌年ぐらいまで待って、少なくとも半年ぐらい台湾とのことをきちんとやった上で、日中正常化に向かうべきだと考えていました。ところが、当時の日本のマスコミでは、田中さんや大平外務大臣がほんとうに日本の将来をつくったかのように報じられていました。

その後ロッキード事件で田中さんは失脚したからいいものの、そうでなかったら、一体日本はどういうふうになっていたかを考えると、まさに中国の思

うように、日本は動いていかざるを得なかったのではないかと思うのです。

## 台湾への危機意識

最近の台湾ですが、陳水扁さんは、混沌というより、もうどうしようもないという感じになってきています。本来台湾は独立するというところで活躍してきた民進党が、行政の責任を担った途端にふにやふにやになってしまい、台湾独立という旗を下げた。ここに台湾混迷の一番の原因があると思います。

台湾はどう見ても独立国家です。李登輝さんが一二年かけてあれほど一生懸命、民主化と本土化をやってきた後を引き継いでこそ民進党だった。ところが、政策の基本ができていなかったのです。

そこで、もし二〇〇八年総統選挙で国民党が勝ち、今人気の馬英九氏が台湾総統になると、これは日本にとって非常に厳しいと思います。



1936年生まれ。東京大学大学院国際関係論課程卒業、東京大学社会学博士。東京外国語大学教授を経て同大学長、国立大学協会副会長を歴任。現在、文部科学省中央教育審議会委員等を兼務。著書に『北京烈烈』（サントリー学芸賞受賞）、『国際関係論』、『歴史の嘘を見破る』（編著）など多数。平成15年度「正論大賞」受賞。

今、台湾ほど親目的な国はないでしょうし、李登輝さんを見て、これが台湾だと思うのもいいのだけれども、そこだけを見てみると間違える。台湾には反日という面もあります。

例えば、台湾の教科書がそうです。皆さんは中国の教科書責めるけれども、台湾の中華民国の今までの教科書では、例えば南京虐殺にしても三〇万人となっている。最近そういう中で、ようやく漫画の新しい教科書や台湾自身のつくる教科書が開始めではいるけれども、未だ全公教育には普及していません。馬英九さんも、連戦さんとともにかなり反日的な人です。馬英九さんはそもそも尖閣列島問題で、ハーバード大学での博士論文を書いている人です。

それから日台関係が悪化して、中国の思うように台湾がマニピレートされるようなことになったら、これは、アジアにとっても、世界にとっても、大変なことになります。果たして台湾に、李登輝さんなりの影響下にあるグリーン陣営が今後も政権を維持できるかどうかについては十分な危機意識を持っていなければいけません。

しかし、一方では民進党にある種の期待が出てきていることも事実です。行政院長に新しく就任した蘇貞昌さん。彼はもともと美麗島事件では陳水扁さんと一緒に弁護側にいた人です。それから副院長に就任した蔡英文さんという才媛です。この蘇貞昌・蔡英文コンビがこれから一年半位でどこまで伸びてくるかを注目したいと思います。

## 待たれる李登輝さんの訪日

実は、本来なら今月李登輝さんが来日される予定があり、そのときにはこの東京財団の虎ノ門DOJ Oで、講演をしていただきたいと思っております。

その日程が丁度今日だったのですが、李登輝さんがたまたま風邪をこじらされて、軽い肺炎になられたために、訪日は延期されました。

しかし、もう健康は回復されています。実は私は夕べも李登輝さんと電話でお話ししました。が大変お元気です。一昨日は、群策会という政策集団の三周年記念の会でスピーチをされておられます。

ご健康も回復されてきたので、李登輝さんにはぜひ日本に来ていただけたらと思います。そしてその際には、この虎ノ門DOJ Oで講演いただけたらいいのですが、李登輝さんは今までは来日されても東京にも寄れなかった。日本は自由な国なのに、しかも李登輝さんは第一線から退いているのに、東京に来られなかったのです。しかし、誰がどこに行くのかをけしからんというようなことを外交の手段にするなんていうことは、この二一世紀に絶対にはなりません。

李登輝さんの訪日の成功によって、「李登輝さんが日本に来ることはけしからん」とか、「李登輝さんが東京に来ることもけしからん」とか、「日本で講演することがけしからん」というようなことは、言論の自由や民主主義が保障された日本では絶対にあり得ないということをはっきりとさせたいと思います。

道義も公共の精神もなく軍事力だけで目的を達成することは許されないと、人の国の内政に、靖国問題にせよ、自民党の総裁選にせよ、干渉することは絶対に許されないと、はっきりとさせたいのです。

そんな自由や民主主義に反することは言いだせもしないという雰囲気をつくっていくことが、日本の将来のためにも、是非必要だと私は思います。

# 日本人の

# しらからか

## 対決力

特集



### INDEX

- 巻頭言 負けるが勝ち —武士道から考える対決力—  
日下 公人
- 「日本市民会議」の立ち上げ  
梶原 拓
- 日中は「帝国の理念」でも争っている  
野田 宣雄
- 日本とこれからの台湾  
中嶋 嶺雄
- 中国の対米対決力と東アジアの安全保障  
茅原 郁生
- 政党の対決力とコミュニケーション戦略  
川上 和久
- 政策形成過程を放映せよ  
田中 良紹
- 地域社会のための犯罪者情報の提供と支援システムづくり  
諸澤 英道
- 改革を創造につなげるには  
山口 栄一
- アウトローの超克  
石渡 正佳
- 二十一世紀型の外国人政策における「対決力」  
浅川 晃広
- 国際的な「対決力」を持つ知財戦略とは  
生越 由美
- 行き詰った金・盧政権 —脅しに屈せず制裁発動を—  
平田 隆太郎
- 「格差」問題で揺れるインド  
森尻 純夫
- 米—イラン直接対話の背景  
菅原 出
- 我が国の対中央アジア戦略を検証する(上)  
畔蒜 泰助
- 自衛隊撤収後のサマーワへの配慮  
佐々木 良昭